

フランス語フランス文学会
2025 年度秋季大会

ワークショップ要旨集

2025 年 10 月 26 日（日）

『人間喜劇』全訳版刊行プロジェクト始動にあたって

松村 博史（近畿大学教授、コーディネータ）

柏木 隆雄（大阪大学・大手前大学名誉教授）

村田 京子（大阪府立大学名誉教授）

鎌田 隆行（信州大学教授）

このたびバルザックの『人間喜劇』の全訳版の翻訳が水声社から刊行されることになった。これまでも「バルザック全集」の試みはあったが、『人間喜劇』の全ての作品を網羅するものではなく、また配列も翻訳者あるいは出版社の意図による恣意的なものであった。今回の『人間喜劇』全訳版は、バルザック自身が構想した1845年の作品カタログおよびその後の作者自身による修正に基づくもので、未完作品や構想のみの作品もカタログの順序通りに配置し、バルザックの専門家による解題を加えている。またこの全集では、バルザック自身が執筆した、あるいは他の著者に直接指示して執筆させた序文などを収録していることも大きな特徴である。

本ワークショップでは、『人間喜劇』全訳版刊行という壮大なプロジェクトを始めるにあたり、プロジェクト責任編集者の一人である柏木隆雄、バルザックの作品群を構成する各情景・研究の編集担当者（松村博史、村田京子、鎌田隆行）がこの全集の編集方針の説明と、その意義について明らかにするつもりである。

全体の構成としては最初に、松村がイントロダクションとして作家バルザックにおける全集の意味について説明し、次に柏木がこれまでの日本におけるバルザックの翻訳を振り返り、今回の全訳版の意義を説明する。村田はバルザックの作品における序文の機能について分析し、鎌田は未完作品群が『人間喜劇』の形成にいかに関与したかを解説する。会場の参加者からも貴重な質問や意見を頂戴し、活発なディスカッションが行われることを期待している。

『メダンの夕べ』再読——戦争、自然主義、女性の表象

足立和彦（名城大学、コーディネータ）

福田美雪（青山学院大学）

安達孝信（名城大学）

『メダンの夕べ』は、1880年に刊行された共作短編集であり、エミール・ゾラと彼を慕う5人の青年作家（モーパッサン、ユイスマンス、セアール、エニック、アレクシ）の作品を収録している。ゾラの住まいである「メダン」をタイトルに掲げた本書は自然主義流派のマニフェストであると同時に、普仏戦争を主題とした各作品は辛辣な戦争批判を展開している。新世代の到来を告げることによって自然主義運動の転機をなすとともに、巷に流布する愛国的言辞と一線を画し、戦争を語る新しい話法を提示したという点で、本書は19世紀の小説史において重要な意味を持つものである。

フランスでは、2015年にポッシュ版（GF Flammarion）に加えられ、2023年には本書に関する大規模なコロックが行われるなど、『メダンの夕べ』の歴史的意義が改めて注目されている。その一方で、日本ではこれまで（ゾラおよびモーパッサンの作品を除いて）その意義が十分に認識されてきたとは言い難い。

このたび、本書の本邦初訳（足立和彦・安達孝信訳、幻戯書房、ルリユール叢書、2025年11月刊行予定）を上梓するにあたり、本ワークショップにおいて『メダンの夕べ』全体を読むことの意義を改めて考えたい。それぞれの作品を相互参照させることで見えてくるものは何か。こんにち忘れられた3人（セアール、エニック、アレクシ）の作品は何を語っているのか。本作には男性（兵士）のみならず、女性の登場人物も少なくないが、そのことは何を意味しているのか。より広く、人は戦争について何を語るができるのか。そうした問いについて、パネリストの発表と聴衆との応答を通して考えてゆきたい。

足立は、書籍刊行時の書評を概観することを通して、本書が当時の文壇にどのように受け止められたかを明らかにする。とりわけマイナーな3作についての言及に注目し、それらの作品の持つ意義と価値を改めて問い直したい。

福田は、ゾラの「水車小屋の攻防」を取り上げ、抒情的な田園風景と凄惨な戦闘描写という極端な二面性について分析する。緊密な構成の短編は、過去作の変奏でありつつ、いずれ書かれる作品の予兆も多分に孕む。生と死、勝利と敗北、祝祭と喪がたやすく反転する閉じたトポス、とりわけその開閉を担うヒロインの両義的な性格について読み解きたい。

安達は、ユイスマンスが「背囊を背負って」を『メダンの夕べ』に再録する際に施した、削除（芸術的文体など）と加筆・修正（スカトロロジー、女性表象の二極化）の分析を通して、作家の自然主義的文体探究に反戦思想が果たした役割について考える。

それぞれの発表（約 30 分）のあとには質疑応答の時間を十分に設ける。出席者とのあいだで活発な議論を交わせるように進行に配慮したいと考えている。

「今、ユートピアを問う」

小倉孝誠(慶應義塾大学、コーディネータ)

井田尚(青山学院大学)

福島知己(帝京大学)

宮川朗子(広島大学)

2025 年秋に、『ユートピア文学選集』(平凡社ライブラリー)が刊行される。18 世紀末から 20 世紀初頭の時期に刊行された、ユートピア思想・文学の作品を収めたアンソロジーである。ユートピア文学(およびその裏面であるディストピア文学)と言えば、英米圏で優勢なジャンルという認識が、日本では強いだろう。しかしフランスにも、ユートピアをめぐる思想と物語の長く、持続的な歴史がある。

戦争、社会的分断の激化、異常気象、AI など先端テクノロジーが惹起する懸念などが世間を騒がせる現在、世界と人類の未来にたいして楽観的になるのはむずかしい。悲観主義を標榜するほうが聡明に見えてしまうのが現代だろう。しかし、広義のユートピアに希望を託した人々が世界と社会を変えてきたのも事実である。現時点では存在しないが、近い未来において望ましいものや制度を想像／創造するのも、文学の役割のひとつだった。

本ワークショップでは、上記の選集に収められた作家、作品を出発点にして、近代フランスにおけるユートピアの思想と文学をさまざまな視点から考察する。小倉がワークショップの趣旨と、ユートピア文学の全体的構図を解説した後、三つの発表が続く。

井田は、『百科全書』、ディドロ、ヴォルテール、メルシエらによる啓蒙期のユートピア小説、さらにはコンドルセの『人間精神の進歩の歴史的一覧の素描』(第十期)までを対象に、ユートピアが現実社会と地理的に隔たる架空の理想郷から現実の未来像へと姿を変える時空の転換の兆候に着目しながら、啓蒙期のユートピア論の航跡を見届ける。

福島は、19 世紀に社会主義者を中心に、ユートピアの即時的現実化に対する関心が高まっていったことを述べる。その 2 つの様態としてエティエンヌ・カベ『イカリヤ旅行記』およびジャン＝バティスト・ゴダン『社会問題の解決法』を取り上げ、その起源や言説上の特徴などを検討する。

宮川は、エミール・ゾラの草稿中にある、ユートピア小説群『四福音書』の構想に注目した後、このシリーズの第 2 巻で、上述の文学選集に収録される予定の『労働』について、その着想源、この小説に描かれた理想社会の特徴、同時代評から今日までの受容を概観する。

本ワークショップが、ユートピア思想・文学の豊かな多面性について議論するきっかけになれば幸いである。

クンデラと私——作家を追悼することについて

篠原学（大阪大学、コーディネータ）

塩谷祐人（明治学院大学）

ローベル柊子（東洋大学）

須藤輝彦（東京大学）

2023年7月にミラン・クンデラが他界してから2年が経つ。その間、作家の追悼のために国内外でさまざまな文章が書かれ、イベントが催された。そうした動きが一段落した今日、かつて小説『不滅』において作家の死後の名声について独自の省察を展開したこの作家と追悼という行為との相性を、あらためて考えてみる余地があるのではないか。追悼が記憶に関わる作業であるとするならば、私たちは作家を追悼することで何を記憶しようとしているのか。たとえばこのような問いをクンデラから引き受け、応答しようとすることは、記憶をめぐる問題に関心を寄せ続けたクンデラの作品世界をよりよく理解することに繋がるだろうし、そのことは追悼の一般的な趣旨に適っているように思える。

他方で、こうした問いは、研究対象としてのほかでもないこの作家をめぐる、残された者が何を言うのかという別の問いの前に、私たちを立たせよう。作家研究と追悼との関係を考えることで、私たちは研究者としての自身のことば遣い、対象との距離、アプローチ等々について再考させられる。いや、「私たち」というとき、人はすでに研究の言説を紡いでいるのであって、ここはもう少しそのことに自覚的に「私」という主語を取ることにしてもよいのかもしれない。すなわち、私はどのようにこの作家を読みうるのか、また読んできたのか。それについて私はどのような角度から、何を語りうるのか、また語ってきたのか。

本ワークショップでは、クンデラという対象と向き合ってきた同世代のパネリストたちがそれぞれの「クンデラと私」を語り、フロアと共有することで、追悼の一つの形を模索したい。最初に篠原が趣旨を説明したのち、塩谷は、越境した作家が死後に眠る場所／帰る場所について考えを述べる。ローベルは、クンデラが描く「女性」をテーマに、年齢と経験を重ねるにつれて自身のクンデラの読み方がどう変わったのかについて話す。須藤は、クンデラが生涯抛りどころにしてきたヨーロッパというトポスについて、（非西洋人である自分から見た）その限界も含めて語る。その後できるだけ多くの時間を、足を運んでくださった方々との意見交換にあて、作家を追悼することについてともに考え、可能なら追悼の先にある研究のありようを思い描いてみたい。

Discussion sur le Choix Goncourt du Japon 2026 : impressions de lecture avant sélection

Éric Avocat (大阪大学、コーディネータ)

Marie-Noëlle Beauvieux (明治学院大学)

Vincent Brancourt (慶應義塾大学)

Justine Le Floch (京都大学)

Chloé Viatte (順天堂大学)

Ce workshop propose une reprise de celui qui s'était tenu au Congrès d'automne 2025 à Kwansei Gakuin, sur le même thème, avec les mêmes intervenants (cette nouvelle édition étant susceptible d'être élargie à d'autres participants, dont la liste n'est pas définitivement arrêtée à ce jour). Il est en effet lié à un événement récurrent mobilisant une partie de la communauté des chercheurs en littératures de langue française, le Choix Goncourt du Japon, auquel le Congrès d'automne de la SJLLF offre, chaque année, une mise en valeur tout à fait appropriée. Il prend place dans un moment particulier, inséré dans le court laps de temps entre la publication de la deuxième sélection de l'Académie Goncourt, et le début du travail des étudiants japonais, invités à retenir de cette liste quatre finalistes afin de leur appliquer une lecture méthodique et approfondie, dans le cadre des groupes de travail menés par les enseignants. Les panélistes, qui font partie de l'équipe chargée de la rédaction des notes de lecture destinées à servir de base au choix initial des étudiants, tireront à chaud de leur travail quelques réflexions sur les tendances les plus récentes de la création littéraire française et francophone, et les mettront en perspective avec leur expérience des années précédentes. Chacun et chacune d'entre eux rendra compte d'un ou deux ouvrages de la liste de l'Académie Goncourt, de façon à couvrir les huit ou neuf titres qui la composent, à tracer un aperçu synthétique de leurs spécificités, de leurs forces et de leurs faiblesses éventuelles, et à nourrir une discussion collective aussi riche et stimulante que celle qui s'est déroulée l'année dernière.